

名城大学 経済・経営学会会報

No.61

『名城論叢』
第十六卷 第一号 付録
二〇一五年七月三十一日
名城大学 経済・経営学会 発行

「変り種」学部長の出現、 自己紹介を兼ねて

経営学部 瀬川 新一

学部長に就任すると、挨拶を兼ねたエッセイを書くことが慣例となつていくようです。原稿を依頼されたとき、かるく承諾してしまいました。「はい」と言つてしまったのですが、何を書いてよいのやら、と後悔まじりに思案しています。苦しまぎれに、研究テーマをネタに簡単な自己（性格）紹介から書き始めようと思ひます。

経営学部の歴代の学部長を思い浮かべてみると、初代の今井先生から、岸川（典）先生、森川先生、そして、前学部長の宮崎先生とつづいてきました。私で五代目になるわけですが、どうも変り種の学部長が出現してしまつたように思ひます。このように記すと、心配や不安を持つ方がいるといけませんので、先回りしておことわりしておきます。学部長が学部運営・行政

の最高責任者であることは、十分に理解・自覚しているつもりです。また、経営学部には有能な人材がそろつており、その運営に支障が生じることはありません。

私は慶応義塾大学の出身ですが、同僚のM先生は、これを知つて、慶応義塾大学の卒業生に対するイメージが変わつた、と話してました。入学当初、多くの同級生が東京・横浜を中心とする有名進学校の出身者であり、地方の無名校の出身者である田舎者の私には、大学キャンパスは場違いで居心地があまりよくないと感じていました。私は、幼いころから人見知りの引つ込み思案であることもあり、キャンパスでは、どこかアウトサイダー的な存在でした。M先生がどのようなイメージを持たれているか定かではありませんが、私自身、在学中このような存在でしたので、M先生の言にもうなずけるものがあります。もつとも、学部学生時代に限らず、どの組織に属していても、どこかアウトサイダー的な位置取りをしてきましたし、名城大学に赴任しお世話になるようになってからも、それが依然としてつづきました。

ところで、私の学部学生時代の成績は、人様に披露できるしろものではありませんでした。それにひきかえ、友人・知人は、優秀な成績をやすやすと収めているようにみえました。とりわ

け、専門ゼミナールの「卒業論文」作成時には、ゼミの友人はスムーズに論文作成がすすむのですが、私は、文献その他で「勉強」するほど、論文の作成がでなくなっていました。試験に合格し、大学院に進学することが決まっていたので、「卒業論文」は中途半端なものになってしまいました。が、「中間報告」ということで単位をゆるしてもらいました。大学院の修士課程・博士課程、さらにODになっても、基本的に学部時代と同じテーマで研究をつづけました。この間、論文のみなちになつたものは「卒業論文」と「修士論文」以外にめぼしいものがなく、しかも「修士論文」も惨憺たる内容のものでした。博士課程にすすんだとき、指導教授に「修士論文」作成で何がわかったかと尋ねられ、「何もわかっていないことがわかりました」とお答えしたことを今でも記憶しています。三年かけて作成した「修士論文」も惨憺たるもの、博士課程にすすんでも論文ができない。こんな学生を追い出さずに、在籍をだまっただけでいただいた先生方には感謝しています。大学院の仲間とはというと、このときも、順調に業績をあげていました。

当時の私の研究テーマは、巨大企業における「所有と支配の分離」命題でした。一九八〇年代に大学院に在籍していたのですが、この時期に再び、国内外で会社支配問題に関心が高まり、多くの研究者によって論文が発表されました。会社支配をめぐる論争は、バリー・ミーンズによって提起された「経営者支配」命題を中心として展開されていたと言えます。当時の議論は、その特徴として、機関投資家・機関株主が大株主として台頭してきたことを背景として、「反経営者支配」仮説が出現してきました。

した。このころの私は、片端から讀論者の所説を批判・否定していました。「破壊のための批判」を繰り返していたわけですが。目にしたものは、その全てに嘔みついていた凶暴な院生だったかもしれない。そしてついには「破壊のための批判」は、自分自身も破壊することになってしまいました。自分が拠つて立つ理論的フレームワークがなければ、なんら理解も発言もできないのです。

我ながら自らのアホさかげんに呆れるのですが、このことに気付いた、いや、気付かされたのは、博士課程も半ばが過ぎようとしているころでした。自我ばかり肥大化して、外面的な批判に終始していた自分を反省し、論文の字面を単に追うのではなく、その論者以上に彼らの所説の主旨・意味を学ぼうとする姿勢に転換しようと考えようになりました。原点に返れ。会社支配をめぐる議論の中心論点はバリー・ミーンズの所説でした。あらためて彼らの著書『近代株式会社と私有財産』から学ぶことにしました。彼らの著書を素直に読めば、近代株式会社制度によって伝統的な私有財産が再編され、これにもなって株式会社企業の運営原理の変更がせまられることになる、という論旨であることが理解できました。バリー・ミーンズの所説は、株式分散による「経営者支配」の発生と会社運営原理の変質が直結され、この論点に焦点が当てられて論じられることがほとんどでした。しかしながら、彼らの所説の意味を理解するためには、そこに、忘れられた別の重要な論点があるのではないか。こんなことを考えるようになりました。こうした学習の成果は、論文としてまとめることができました。拙稿

とはいえ、やつと論文が作成できたわけです。

ある哲学者は、「成長過程はラクダ、獅子、幼児の順で移行する」という考え方を著しています。こうした考え方の解釈については議論のあるところでしよう。その上でこの言に倣えば、ラクダの時期は、黙々と論者以上にその所説を深く学ぶ段階であり、獅子の時期は、所説の内在的批判の段階である。そして、幼児は、創造性が豊かであり、具体的に遊びをつくりだし楽しんでいく。同様に、学問をさらに究めていくと、自由自在に知識や理論を使いこなせるようになる。この段階が幼児の時期に相当する。そして、ラクダとして学びを深めれば深めるほど、こうしたことは、幼児となることを準備してゆくことと等値である。と言えるかもしれません。

一九九〇年代に入ると、会社支配問題 (Corporate Control) は議論が下火となり、かわってコーポレート・ガバナンス問題 (Corporate Governance) がさかんに議論されるようになりました。コーポレート・ガバナンス問題は、企業形態の差異にかかわりなく、企業一般のガバナンスとして議論されることがありますが、固有の問題として、まずは Corporation (株式会社) の Governance に関する問題のはずです。現在、「資本主義経済の危機？」について大きな問題関心がよせられるようになっていきます。トマ・ピケティの『二一世紀の資本』なる高価な学術書も大きな注目を集め、一般読者のための解説本が多数出版されています。こうした状況のなかで Corporation の Governance に関する問題が議論されています。パーリーミーンズ『近代株式会社と私有財産』は、一九三二年、米国資本主

義が大きく揺らいでいた時期に公刊されたものでした。彼らの所説もこうした時代環境のなかで生まれてきたものと言えるでしょう。当時の時代環境と現在のそれを同等に考えることはできませんが、パーリーミーンズが提起した問題は、本質において、今日のコーポレート・ガバナンス問題でもあると言えます。今日のコーポレート・ガバナンス問題に関する論文には、Corporation というものの (本質に関する) 検討なしに、取締役会の構成や株主議決権行使に論点を置く矮小化した事象的な議論が見られるのですが。

いずれにしても、その論者以上に彼らの所説の主旨・意味を学ぼうとする姿勢に転換しようとしたとき、別の意味で、理解・発言に慎重にならざるをえなくなりそうです。自問自答してみるのは、ミイラ取りがミイラになってしまいか。また、自分の理解・考え方は「正しい」のかと。高等学校・大学受験まで時期をさかのぼるつもりはありませんが、少なくとも大学に入学して以降、ずっと自分の「ものわかり」の悪さ・よりりようの悪さの証の連続でした。このため、自発的にも強制的にも自分の思考には慎重にならざるをえない、アウトサイダー的な位置に立つてきました。

人生はわからないもので、学部のインサイダーの中核である学部長になってしまいました。想像だにしなかったことです。冒頭に、「変り種の学部長」が出現してしまつたと申しました。学生時代・院生時代の私を知る者には、私が学部長になったことは、ぜったいに信じられないことだと思えます。一般的には、アウトサイダー的な存在であった者が組織のトップに就くの

は、組織変革がせまられているときです。これまでとは異質な人材によって、組織体質や価値観・慣行の変革が必要とされるときです。名城大学にお世話になり始めてから二〇と数年が経過しました。この間に、大学をとりまく環境が大きく変化してきました。直近の数年の変化は、加速度的なものとなっています。商学部が経営学部と経済学部へ改組再編され、経営学部が創設されてから約一五年が経過しました。経営学部は、これまで何度かカリキュラムを改正し、その都度環境変化に対応してきました。しかしながら、現在進行している環境変化は、組織体質の変革をもとめるものであるかもしれません。私の定年退職後、商学部を知る者は数名しか残りません。この意味で、現在は「真正」経営学部への移行期にあり、学部長としての私の役割は「真正」経営学部への転換のための露払いであるかもしれません。どうせ学内・学部内で失う立場もなかるうからと、学部長に据えられたでしょう。

挨拶を兼ねてつらつらと自己紹介をしました。内容のない話で、お耳ざわりであったと思います。ご容赦ください。「真正」経営学部とは、いかなるものか。また、こうした学部をいかにして創っていくのか。大きな課題です。次世代の仲間が中心となって解決していかなければならない課題です。こうした課題を有利に解決していくための環境をどのように整備していくか、実務家として走りながら考えていこうと思います。

追記：

この春、3月31日をもって、中根敏晴先生が名城大学学長職

を任期満了により退任されました。中根先生は、商学部改組による経営学部設置時には、商学部最後の学部長として学部改組を推進した立役者でした。改組後は、経営学部において、学部の重鎮として経営学部発展に大きく貢献していただきました。また個人的にも、名城大学に赴任して以来、いつになってもアウトサイダー的な存在であった私を有難くも放置していただきました。ここに心底より感謝いたします。